

研究論文

拡張する市街地と先住民族集落 —台湾花蓮市近郊の阿密集落の市街地化—

原 英 子

The Expanding Urban Area and the 'Amis People's Villages in Taiwan

Eiko Hara KUSABA

This paper aims to describe how the 'Amis people living near the urban city are defining their identities against the invading people coming from another area.

The 'Amis is the largest ethnic group of indigenous peoples in Taiwan. They live at the east foot of the Zhong-yang Mountains area and near the East Coast area, namely the plains of east Taiwan. In east Taiwan, there are two big cities, Hua-lian and Tai-dong. 'Amis people live in many villages around there. Sometimes the 'Amis have been attacked by enemy ethnic groups and been made to move other places.

After World War II, 'Amis villages gradually increased population, particularly near the big city of Hua-lian. This increasing population has been caused by the influx of people to the urban area, including not only the 'Amis from rural areas but also many ethnic groups coming from all parts of Hua-lian Prefecture.

In addition to the increased population, transportation facilities have been improved, and this means that a large number of people live in the suburbs and are therefore linked with urban areas. That is the way the urban area has been expanding.

As the urban area expanded, 'Amis people were forced to change. For example, originally one 'Amis village was divided into 3 political villages, and originally 'Amis villages housed almost only the 'Amis people; however, now circumstances have changed, and we can easily see many other ethnic groups' peoples. In this situation, the 'Amis use their position as villagers in different ways, that is, as the villagers of the original 'Amis village, or as villagers of the political village (a part of the original village). They have two chiefs of their village, one is the traditional chief of 'Amis tribe, another is the political village chief, mostly Chinese. Because of this, they maintain their traditional language, village system, religion and their network system. They choose their attitude toward the traditional village system or political village system, in any case. The expanding urban area has forced many changes for the 'Amis. Under these circumstances the 'Amis have come to recognize their identity more clearly.

はじめに

台湾先住民族中もっとも人口が多いアミは、現在15万人ほどである¹。かれらの居住地は、主に台湾東部の海岸地帯や中央山脈の東麓から広がる平野部および中央山脈と海岸山脈に挟まれた平野部である。集落は、台湾東部のほぼ中央に位置する都市花蓮から東部のなかでも南に位置する都市台東にかけての平野部、および海岸線に沿った地域に点々と連なっている。戦前の馬淵東一の調査によると、アミは周辺異民族のブヌン、ブユマ、木瓜蕃等に脅かされ、集落は、たびたび移動せざるをえず、分散したり、統合したりを繰り返していたらしい。(台北帝国大学土俗・人種学研究室 1935) 康培徳は17世紀から19世紀にかけた歴史資料を駆使しながらアミ集落の歴史の変遷を追いかけているが、歴史資料的にもそうした移動の状況がうかがえる(康1999)。

花蓮は、台湾東部を代表する大きな商業都市である。戦前は花蓮港庁が置かれていたが、この名が示すように国際港の町として賑わいが見られる。現在では、道路の舗装がゆきとどき、各家がバイクや自家用車をもつようになった。それとともに、花蓮市へ通勤できる地域が拡大した。そして花蓮市や隣接する地域には、マンションなどが建てられるようになった。花蓮市やその近辺にはアミの集落が多い。本稿では、花蓮市南西部に位置する吉安郷のアミ集落を取りあげる。拡張する市街地にともない、アミ集落内にもマンションや家が建てられ、戦前までアミの集落だった土地に新しい居住者が入り込むようになり、いわゆる「多民族村」化している。人口流入が多量におこった地域では、もともとのアミ集落が行政的に分割され、違う村落名がつけられることもおこっている。行政村としては村長が中心となっているが、その地域に住むアミ集落では依然として、頭目が選ばれ、アミの集落組織を維持し、機能させている。日常でも、アミ同志の従来の交際が維持されており、新しい居住者とは別のネットワークが保持されている。従来の集落は、拡張する市街地の範囲に取り入れられ、新しい居住者たちの侵入により「多民族村」化しているにもかかわらず、従来のアミ的集落組織やネットワークが保持されているという現状がある。

また、近年アミ的儀礼や行事が観光化され、そうした行事や儀礼にあつまると新聞や雑誌の報道陣の数は増加しつつある。しかしそうした外部からの注目を集める一方、同じ行政村落に住む非アミの人たちは無関心である。これらにみるように地理的に拡張する市街地に取り込ま

れ、新しい居住者が増加しているものの、そのことは、必ずしもアミ集落の統合力を破壊してはおらず、新居住者と従来のアミ住人の間に一種の無関心状態を生じさせている。

なお本稿は、明石書店に依頼され執筆を行なった「アミ—拡張する市街地とアミ集落—」(綾部恒雄監修・末成道男・曾士才編『世界の先住民族—ファースト・ピープルズの現在—』第1巻東アジア 2005年)をもとに書かれている。これは、一般読者を対象にという明石書店の依頼により書かれたため、詳しい事例や注釈、表、地名等は割愛せざるを得なかった。そのため、本稿では、これに学術的に重要と思われる事例や注釈、アミ語のローマ字表記、参考文献、表等を新たに付加している。

1 花蓮市近郊のアミ集落²への人口流入

台湾東海岸にある花蓮市の南西部には吉安郷という郷がある。ここにはかつてナタウランNatawran、ポクポクPokpok、リダウLidawといわれるアミ集落があった³。

花蓮港庁重要施設事項調査会が、表1に掲げたように、1929年12月に行なった調査によると、当時、ナタウラン、ポクポク、リダウというアミ集落には若干の本島人がいたが、内地人、すなわち日本人や他の先住民族はいなかったようである。集落内の本島人の比率は、ナタウランで8.9%、ポクポクで11.5%、リダウで7.7%であった。現在、集落の高齢者たちの話にも、当時は集落のほとんどはアミで、それに若干の客家がいたという⁵。現在では客家、閩南人などの漢民族、それにブヌン族やタロコ族などの山地原住民⁶の人々が住んでいる。あるいは同じアミでも、南勢アミに分類されるナタウラン、ポクポク、リダウ以外のアミが居住している場合もある。吉安郷のかつてのアミ集落は、いずれも他地域からの人口が流入し、いわゆる「多民族村」となっている。

2 行政村落とアミ集落：維持されるアミ集落の人々の関係

(1) 行政村落とアミ集落の関係

吉安郷のアミ集落は、他地域からの流入者が多いため、

² 本論では、行政的な村落を村落と記す。これと区別するため、戦前の文献等に出てくる「蕃社」といわれたアミの伝統的村落は、集落と記すことにする。

³ アミは居住地域で南勢アミ、海岸アミ、秀姑巒アミ、卑南アミ、恒春アミのグループに分類されるが、この3集落は南勢アミといわれるグループに属している(台北帝国大学土俗人種学研究室編1935:391)。南勢アミは、かつて南勢五社として、チカソワン社、ナタウラン社、ポクポク社、リダウ社、タコボアン社があったという(同書:491)。そのうち、チカソワン社は1908-09年の日本の植民地体制への反乱により集落が四散した(同書:501)。またタコボアン社は1878年の清との交戦で四散したという(同書:502)。

¹ 台湾行政院原住民族委員会ホームページ2003年8月29日統計資料では、147,895人となっている。

表 1

	アミ戸数	アミ	日本人	本島人	アミ以外原住民
ナタウラン	236	1138	—	101	—
ボクボク	216	1021	—	117	—
リダウ	123	548	—	42	—

1929年12月末
(花蓮市重要施設事項調査委員会「アミ族教化指導二箇スル基礎調査」より作成)

かつての集落の土地は、行政的に細分化されている。かつてナタウランであった地域は、現在では稲香村、南昌村、宜昌村、北昌村という行政村落に分割されている(許他2001: 6)⁷。ボクボクやリダウの場合は、ナタウランのように多数の行政村落に分割されずにそれぞれ仁里村、東昌村という行政村落名がつけられているが(許他2001: 6)⁸、人口は増加し、多民族村となっている。これらの行政村には、村長がいて、県などの行政組織と村落のつながりを担っている。

行政村落の集会が開かれるとき、たとえばリダウのある東昌村などでは、行政村落の集会所である村の公民館で行なわれる。一方、アミ集落であるリダウの集会では、アミの集会所が使用されており、行政村落とアミ集落の集会所の場所が異なっている。

使用される言語は、アミの集会のときは、主にアミ語が使用され、それを理解しない若年者のために中国語が使用されるのに対し、行政村落の集会の時は、主として中国語が使用されている。

これらに示されるように、行政村としての村落とアミ集落とは、地理的に重なり合っているものの、行政村としてのメンバーとアミ集落としてのメンバー、行政村としての機能や性格とアミ集落としての機能や性格を、地域住人たちは、場合によって区別している。

(2) アミ集落を維持する頭目、長老、スラル組織

伝統的アミ集落は、他地域からの新居住者が多くなった今日でも、伝統的な集落組織が保持されている。大正3(1914)年に行なわれた臨時台湾旧慣調査会の河野喜六による調査では、アミ集落は、司法、行政を長老たちと頭目の合議で行なっていたことが記されている(河野

1914: 152)。アミ集落には、スラルsolalとよばれる男子の年齢階梯組があり、集落の頭目は長老等スラルの上位の者たちの推挙やメンバーによる会議で選ばれていた(河野1914: 152、155 馬淵1979: 44)⁹。

現在でもアミの伝統的行事を行なう場合は、頭目、長老、スラルが中心となって準備、実行をする。中でも8月末～9月に行なわれる豊年祭ミリシンMi-lisinはもっともこの組織の活動が顕著になる。ミリシンのときは遠くに住む者も帰ってきて祭りに参加する。

花蓮市およびその近郊の南勢アミではスラルへの加入式はその年を含めて8年目、すなわち7年毎¹⁰に行なわれている(岡田1942: 251、小泉1933: 104)。古くは22～23歳以上の者が加入していたが、1930年代には17～18歳の者が加入するようになった¹¹(小泉1933: 228)。現在は12～13歳くらいの小学生でも加入式に参加し、スラルのメンバーになっている(王1995: 71-78)¹²。小泉鉄は、昭和の初期の状態として、スラルに加入すると集落の道路の修復や草取り、橋梁の修理、集会所の修繕など、集落共同の生活に必要な労力の提供や鹿狩りや魚とりなどの集落の行事に参加しなければならなかったこと(小泉1933: 253、266、267)、火事や盗賊などの闖入者の警戒、客の接待のためタロアンtaloanとよばれる集会所につめており、夜はそこに寝泊りしていたことを記している(小泉1933: 272-273)。しかし往年のこうしたスラルの活動は、集落内で生活していない場合はできるはずもないし、集落内の道路修復や橋梁の修理などは、スラルとしての活動ではなくなっている。スラルに加入するのは、かつてはスラルに入ることによって一人前として認められ、結婚を許可されていたのであるが(小泉1933: 231-233, 269)、現在では、このような資格を得るためにスラルに加入するわけではない。日常を都市部で生活する者にとっては、加入式に帰郷し、スラルの階級メンバーになることは、自分がアミの一員であること、さらには自己の出身集落を再確認する意味がある¹³。また、同時に加入した他のメンバーと面識をもち、今後の一生において連帯をもたなければならない関係に入ること

⁴ 戦前、台湾に住んでいた日本国籍をもつ漢民族系住民。

⁵ 表1には「本島人」とだけ記載されているが、アミはアミ語で、客家のガイガイgayngayと福佬人のタイワンtaiwanに、区別している。

⁶ 台湾先住民は、その居住地によって山地原住民と平地原住民に分類される。アミは平地原住民である。

⁷ このように、かつてのアミ集落が現在ことなる行政村落に分割されている例は、光復郷のバタアン集落が大安村、大平村、大馬村に、タバロン集落が東富村、西富村、北富村、南富村など(許 廖 呉 2001: 6)にもみられる。

⁸ 許木柱 廖守臣 呉明義 2001 『台湾原住民史 阿美族史篇』台湾省文献委員会編には化仁村として記されているが(p.6)、1973年に東昌村と改名されている。

⁹ アミ集落の長たる頭目は、地域によっては政治的首長と祭事の長を兼ねることがあり、そうした場合、特定の家、もしくは数家の世襲によるものがみられる地域があるが、政治的首長のみの場合は、

一般に集落にある男子の年齢階級上位の男子によって選ばれる(馬淵 1979: 44 岡田1942: 249)。南勢アミの頭目は後者の政治的首長であるが、集落の祭事にもかかわる。

¹⁰ この他、秀姑巒アミの奇密社などは4年毎に(岡田1942: 250-254)、太巴壠社などでは5年毎に(小泉1933: 233、佐山1914: 133)新規加入者をいれる加入式がある。

¹¹ 他の地域のアミ集落では14-15歳くらいが加入年齢なのに対し、南勢アミの3集落は、それより加入年齢が高かった(小泉1933: 238-229)。大正時代初期の太巴壠社などでは14-15歳であった(佐山 1914: 133)。

¹² 南勢アミの大正生まれの高齢者の話によると、昔は、スラルのメンバーになることは、集落の防衛や戦闘要員になることを意味していたので、20歳以上にならないと、その任務に耐えられなかったが、スラルのそういう機能がなくなるとともに加入年齢が低年齢化したという。

識するという意味もある¹⁴。

アミ集落では、頭目、長老を核として、年齢階梯組が組織されることで、アミとしての自覚とその結びつきが強められている。それは行政村落民にはない結びつきである。スラルに加入することでアミ同志の特別なネットワークをつくりあげているのである。

(3) アミ集落を基盤とするシカワサイ組織

①シカワサイ組織とアミ集落について

アミ集落を基盤とする組織に、シカワサイ si-kawas-ay と呼ばれる呪医たちの組織がある。戦後しばらくまで、シカワサイたちは各集落で組織をつくっていた。シカワサイは神の力をかりて病気を治療することができるとアミの人たちは信じている。病気治療の他にも祖先祭祀や死者供養なども行なう。古野清人によると、南勢アミのひとつりダウには戦前、40名ほどのシカワサイがいたという(古野1996(1945):18)。1953年の調査では、29名がいたことが記録されている(唐 1957:34)。この29名は子弟関係のある4つの派閥に分かれていた(唐 1957:33-34)。シカワサイ組織はひとりのリーダのもとに、1人前のアイシダン aisidan とよばれる階級と、病気治療などの儀礼は行なえるが、学び終えてまだ日が浅いクルソド kursodo' 級、見習いのソダイ sodae' 級といわれる階級から構成されおり、これが4組あったという(唐 1957:33-34)。唐の資料に記されたシカワサイ組織を覚えている者たちによると、シカワサイの組織としてはひとつの集落にひとつだったようである。たとえばシカワサイの儀礼で一年間で最大のミルツク Mi-lecok とよばれる祭り¹⁵では、すべての集落のシカワサイがいっしょになって祭祀儀礼を挙行していたという。その際、集落内でもっとも霊力のある者がリーダーをしていた。

リダウに限らず、ポクポク、ナタウランなどにもシカワサイ組織が存在している¹⁶。シカワサイ組織は、アミ集落を基盤としているが、霊力が高いシカワサイは、個人的に親しい他集落のシカワサイの祭りによれば、そこで祭りの儀礼に加わることがある。その返礼として、自分を選んでくれたシカワサイを自己の祭祀のときに呼ぶ。

現在出身集落を出て暮らしている者も、シカワサイの組織としては出身集落の組織に帰属することがある¹⁷。

アミの者は、基本的に自己の出身集落のシカワサイに病気治療や祖先祭祀を依頼する。それというのも、治療や祭祀には、それを依頼した者の祖先たちを呼んで祭祀

することが多いためである。シカワサイは、集落出身メンバーの系譜関係を過去数代にわたって実によく記憶しており、その記憶によって、依頼した家の祖先たちをひとりひとり名前呼び出し供物をささげるのである¹⁸。

②行政村落の細分化に関係なくアミ集落を基盤とするシカワサイ組織

かつてナタウランという1つの集落であった土地は、現在では稲香村、南昌村、宜昌村、北昌村という行政村落に分割されている(許 廖 呉2001:6)。こうした行政村落の分裂にもかかわらず、シカワサイたちは、かつてのナタウラン集落を基盤としたシカワサイ組織を形成している。シカワサイたちの最大の祭り、ミルツクのときは、ナタウラン集落のシカワサイたちがひとつになって祭祀儀礼を行なう。

③ 分住している同一アミ集落出身者を統合する機能をもつシカワサイ組織

シカワサイ組織は、伝統的アミ集落を基盤としたつながりによって維持されるもので、それは現在の居住村落が違っていても、自己の出身と認識する集落のシカワサイ組織とかかわりをもつものである。このことをもっとも顕著に示しているのは、チカソワン(Cikasowan)集落の出身者で作られるシカワサイ組織である。

チカソワン集落は、ナタウラン集落の西方に位置していた。それが1908(明治41)年、隘勇線の警備をめぐる周辺異民族集落等も巻き込んだ闘争をおこし、それに対して当時の宗主国である日本は軍隊を送り込み、南勢

¹⁵ シカワサイが自己の神々を祭祀する祭り。毎年9月半ばから10月にかけて各アミ集落を単位に行なわれる。1人のシカワサイの家に、集落のシカワサイたちが訪問し、彼が祭祀している神々に供物をささげる。一日に1人のシカワサイの家を訪問して祭祀する。毎日繰返し、メンバー全員の訪問が終わるまで続ける(ただし配偶者が死亡するなどの不浄があった家のシカワサイの場合、数年間、祭りに参加しない)。以前、シカワサイの人数が多かったころは、一日に2人のシカワサイの家を訪問することもあったという。

¹⁶ このほか、後述するチカソワンのシカワサイ組織もある。これらは、集落ごとに祭祀儀礼や祭祀方法が若干ずつでも異なっている。リダウとポクポクは、神々の名称や祭祀方法が近いが、ナタウランは供物や祭祀方法がこれらと少し異なっている。またチカソワンはこれら3集落ともっとも大きく異なった祭祀儀礼を行なっている。しかし4集落で共通する部分も多い。

¹⁷ 自己の出自がシカワサイを排出しているロマ'loma'(家)の場合、出身集落を離れて暮らしていても、出身集落のシカワサイ組織に帰属する。しかし結婚後、婚入先のロマが、シカワサイを排出しているロマで、そうした関係からシカワサイになった場合、結婚先の集落のシカワサイ集団に属する。

¹⁸ アミ集落の長たる頭目は、地域によっては政治的首長と祭事の長を兼ねることがあり、そうした場愛、特定の家、もしくは数家の世襲によるものがみられる地域があるが、南勢アミなどは政治的首長のみの場合は、一般に集落にある男子の年齢階級上位の男子によって選ばれる(馬淵 1979:44)。

¹³ スラルは男性のみの加入であるが、女性は、結婚後夫のスラルのメンバーやその妻たちと緊密な関係をもつ。

¹⁴ チカソワンなどでは、葬儀の際、死者と同一組のメンバーが葬儀の手伝いなどを行なう。

アミの他の集落民なども使って鎮圧した(台湾総督府警務局1995(1918):781-830)。チカソワン集落があった場所は、のちに吉野村という日本人村落がつくられた(同書:810、828)。鎮圧後もチカソワン集落の住人は帰村を許されず、新たに指定した場所に居住させられたり、既存のアミ集落へ移住させられたりした(同書:813-828)。集落が分裂させられ、住民が各集落に分住してから100年近くが経とうとしているが、分散したチカソワン集落住民の子孫たちは、現在もチカソワンとしてのアイデンティティを強くもっている。現在は離れた集落で暮らしていても、親族の系譜的記憶を維持している場合が少なくない。ミリシン(豊年祭)といわれるアミ集落の祭典のときには、現在居住している集落の間で往来しあうことも頻繁である。

このようにチカソワン集落の出身であることを意識する者たちの結びつきは強いが、そのことを表わすもののひとつにシカワサイ組織がある。集落が分散しているにも関わらず、神祭ミルツクのときなど一同が集まり、各集落の仲間の家をめぐって祭祀儀礼を行なっている。あるいは種々の病気治療の儀礼のときなども、リーダーの呼びかけに応じてすぐに集まってくる。分散しているチカソワン出身者がつくるシカワサイ組織は、シカワサイ組織のなかでも行動範囲がもっとも広い組織である。広範囲に活動をしなければならないにもかかわらず、ほとんどチカソワン出身者のみで組織されているのは、シカワサイ組織が伝統的アミ集落を基盤としたつながりによって維持されるからである。

以上、みてきたように、シカワサイ組織は、現在の行政村落の分割には影響を受けずに、かつてのアミ集落の範囲を基盤として形成されている。あるいは出自が同じ集落の出身たちが集まって組織が形成されている。いずれにせよ、かつてのアミ集落の結びつきが、現在の状況に影響されずに強固に保持されているのがみられる。

(4) 日常の中でのアミ集落民どうしのつながり

花蓮市近郊の吉安郷では、アミ集落の土地が宅地開発され、新しい居住者が入り込み、いわゆる「多民族村」化していることを先述した。新しい住民たちと旧アミ集落の住民たちの付き合い方、アミ同志の関係のあり方をみると、かつてのアミ集落の人々の暮らしが、集落環境が変化した現在も維持されているのを見ることができ

る。そのひとつとして家の建て方の違いをみてみよう。新居住者たちの家は多くの場合、頑丈な塀で囲まれ、入り口には他者が容易に入れないような門を設置している。

訪問にはインターホーンで取り次いでから門が開けられる。一方、アミの人々の家は、誰でもすぐにはいりこむことができる開放的な庭をもっていて、そこに朝早くから友だちや兄弟姉妹たちがやってきておしゃべりをしたり、酒を飲んだりしている。あるいは、夕食を庭でとる者たちもいる。庭の代わりに倉庫がそうした場所が使われることもある。かつて家の庭であったところに道路がとおった場合なども、道路際で食事をとっている者たちをみかけることがある。しかし今日、アミの家でも塀や門を設置している家は増加しつつある。そうした門などが設置されていても、親戚やキョウダイ、友だちなどは気軽に入っていく場合が多いようである。

筆者が滞在した1990年代半ばごろは、各地で健康食品、健康器具などの販売をしているのを多く見ることができた。ほぼ毎日、夕方になると公民館前の広場などに村落の人々が集まり、健康食品や健康器具の販売人の説明を聞く。帰りにちょっとした洗剤などの記念品をもらうので、それをもたらるのが付近に住む人たちの楽しみになっているようであった。毎日大勢の人々が集まり、並べられたいすに着席する。別に反目しているわけではないが、会場の座席は自然と大まかにアミグループと漢民族グループが分かれていることが多いようであった。アミグループの中も、キョウダイ、親戚など特に親しい人たちは近い座席を占め、そこでおしゃべりして時間を過ごすのがまた楽しみのようであった。

これらの事例にみられるように、居住環境の変化にもかかわらず、アミ集落のメンバーは、日常生活のなかでお互いの往来を頻繁にしている。ちょっとしたおしゃべりなど機会をつくっては従来の絆を確かめ合い、強めあっている。

3 観光化と非観光化

アミのいわゆる伝統的儀礼や行事の中には、観光化していくものと、観光化されないが、維持されているものがある。また観光化しているからといって、必ずしも非アミの村落民が興味を寄せているとは限らない。

南勢アミの年齢階梯組加入式は、8年に1度しか行なわないためか、多くの新聞や雑誌、テレビ関係の報道陣、文化人類学をはじめとする各専攻の研究者や学生等が取材におとずれる。加入式が行なわれた翌日には必ず、花蓮の新聞地方紙に大きく取り上げられる。なかでも南勢アミのリダウだけで行なわれる舟祭は、近年ますます大勢のカメラマンが取材に訪れるようになった。古野清人は、舟祭が、以前は14年に1度の儀礼であったのが、当局の指導で、1930年代後半から新しいスラ編成のときに行なうようになったと記している(古野1996

(1945) : 268,271)¹⁹。台湾先住民族の集落に長く留まり、調査をしていた森丑之助は、1897(明治30)年に行なわれた舟祭をみている。森は、この舟祭は、他にあまり知られていない祭りだと記している(森1901:208)。これにうかがわれるように、舟祭は、集落の行事で観光者もいなかったのであろうが、近年は特に外部からの報道がますます大きくなって人々の注目が集まるようになった。しかし一方で、リダウに住む非アミ系住民が、特に行事を支持し、見物に行くわけでもない。従来のアミ集落の居住者だからといって、アミの伝統的集落儀礼に必ずしも興味を示しているわけではない。

同様のことはアミの祭典、アミの正月ともいわれるミリシン(豊年祭)にもみられる。ミリシンには、いくつかの集落が合同して行なう観光を目的としたものと、各集落で行なうものがある²⁰。後者のミリシンの場合、観光で来る者もいるが、もっぱら各集落のアミがお互いに呼んだり呼ばれたりする祭りである。つまり各集落におけるミリシンは、アミ間の相互交流が盛んであるが、その集落に住む非アミの者が必ずしもそうした祭典に興味をもっていない場合もある。極端な場合、自分が住む村落でそうした祭典が行なわれている日にそれを知らないこともある²¹。

以上、スラルの加入式と同様、従来のアミ集落に住む居住者だからといって、必ずしもアミ的なものに興味を示すわけではないのである。

これらの例は、同じ村落に住む住民ではなく、もっと外部からの注目を意識した、すなわち観光という部分を意識していた活動である。こうした活動以外に、各家で行なわれる儀礼的なものは、必要と思われる人々によって維持されている。たとえば前述したシカワサイに依頼する祖先祭祀や死者供養、新築や改築、増築のお祓いなどである。これらのアミ的な信仰儀礼は、観光化せずに、各家で依頼を判断して行なっている。

観光化されるアミ的行事や儀礼をみると、かつてのアミ集落で行なわれていたものが多く、そうした活動には、頭目や長老がかかわっている。一方観光化しないもの—非観光化—は、個人や家単位の行事や儀礼であるといえる。

まとめ

以上、花蓮市の南方に隣接する吉安郷の南勢アミの集落の実態をみてきた。これらの集落では、花蓮市に近い地理的環境から、市街地拡張にともない、集落に新しい

マンションやアパートが建ち、新居住者が大量に入り込んできた。人口がたいへん増加したために、従来ひとつのアミ集落だったのが、複数の行政村落に分割されたところもある。

こうした行政村落は村長がいて、行政と村落の結びつきを仲介しているが、アミ集落には、伝統的に頭目、長老、スラルの組織があり、アミ集落の組織としての統合を行ない、アミ間のネットワークを作り上げている。また、アミ集落を基盤とした活動にシカワサイといわれる呪医組織があり、この組織は、アミ集落がいくつかの行政村に分割されても、あるいはアミ集落が行政的に分散させられても、伝統的集落を基盤としたネットワークを維持させている。また、新しい居住者が増加して、集落内に外部者の家などがたつようになっても、日常における人々の交際の往来は続けられている。

アミ的行事や儀礼には、観光化されるものと非観光化のままのものがある。観光化する活動には、多く頭目や長老がかかわっているが、非観光化のままのものは個人や家単位の行事や儀礼である場合が多い。また観光化といっても観光するのは村落内の者を対象としているわけではない。それは村落外の者が注目している場合もみられ、同じ村落に居住していても、アミ的行事に興味を示していない者もある。

これらのことから、アミ集落はその地理的に環境から、拡張する市街地に取り込まれ、新しい居住者が増加するという現象が生じているものの、そのことは、必ずしもアミ集落の統合力を破壊するにはいたっていないといえる。新居住者と従来のアミ住人の間は反目しているわけではまったくないが、お互いの生活に干渉しない一種の無関心状態が存在するといえる。

引用文献

- 岡田謙 1942『未開社会における家族』(弘文堂書房)
 花蓮港庁重要施設事項調査会1929『アミ教化指導二関スル基礎調査』
 小泉鉄 1933『台湾土俗誌』東京建設社
 佐山隔吉 1914『臨時台湾旧慣調査会第一部 蕃族調査報告書 阿眉族奇密社 同 太巴聖社 同 馬太鞍社 同 海岸蕃』(臨時台湾旧慣調査会)
 台湾総督府警務局 1995(1918)『附録第三 花蓮港蕃変事件顛末』(『理蕃誌稿』第1巻)(南天書局復刻版) 781-830頁

¹⁹ 森丑之助の記録(森1901:207-212)や佐山隔吉(佐山1914:80-82)、小泉鉄(1933:219-231、249-253)をみても、スラルの新加入式と舟祭が関連するものとして記述されていない。しかし現在では、一連の行事となっている。

²⁰ ただし、奇密社など古いタイプを残しているとされる祭りでは、集落の祭典そのものが観光の機能をもっているものもある。

²¹ 筆者は、ミリシンの日にその村落の漢民族の人たちに祭りのことを尋ねたが、知らない者が多かった。

台北帝国大学土俗・人種学研究室 1935『高砂族系統所
属の研究』(南天書局 復刻版)

古野清人 1996 (1945)『高砂族の祭儀生活』(南天書局
復刻版)

馬淵悟 1979「台湾海岸'Ami族調査報告」(南山大学大
学院文化人類学研究室『歴史と構造』7)

森丑之助 1901「台湾奇萊里留社の舟祭」(『東京人類学
雑誌』180) 207-212頁

<中国語文献>

王煒昶 1995「阿美族舟祭」(『大地』1995年9月号)
68-78頁

唐美君 1957「阿美族里漏社の巫師制度」(『台湾研究』
2:40) 35-45頁

許木柱 廖守臣 吳明義 2001『台湾原住民史 阿美
族史篇』台湾省文献委員会編

康培德 1999『殖民接触與帝国辺陲—花蓮地区原住民十
七至十九世紀的歴史変遷』(稲郷出版社)

付記

本稿は、1994年4月から96年3月にかけての現地調査、
2001年8月に行なった現地調査、および2004年度に入手
した文献による資料に基づいている。その際、平成13年
度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)課題番号
13610370)、平成16年度科学研究費補助金(基盤研究
(C)(2)課題番号16520059)の支援を受けてなされた。
調査は台湾中央研究院民族学研究所の助力を受けてなさ
れた。関係する方々に感謝申し上げる。